

広瀬淡窓の自然観について

杜, 栄
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/18156>

出版情報：中国哲学論集. 21, pp.70-85, 1995-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

広瀬淡窓の自然観について

杜

栄

はじめに

広瀬淡窓は江戸時代の著名な教育家、詩人であるとともに漢学者でもあった。彼は天明二年（一七八二）、豊後日田（今の大分県日田市）で生まれた。淡窓は幼年の時から学を好み経史を熟読した。十歳の時、松下西洋に教えを受け、その後、遊学して筑前（今の福岡市）の著名な学者、亀井南冥、昭陽父子に師事したが、病氣のため二年ばかりで郷里に帰ることとなる。しかし、その後も学問に潜心し、教育事業に一生を捧げ、近世日本において最も大きな学塾——咸宜園を創立し、後世教聖と称されることとなった。淡窓は漢学に精通し、その生涯における著述は、すこぶる豊かであり、その上多くの漢文日記や筆記を残している。また数多くの漢詩を創作しており、「通儒」とも「海東詩聖」とも称された。淡窓は生来病弱で、さらに二十八歳の時、眼疾にかかったため、農商の業への道を捨て、専ら学問に心を注ぎ、後学を教育することに身を捧げた。彼は一生篤謹にして、俗を超え、善を求め、内省恭敬に努め、その感化により門下には多数の優れた人物が輩出した。淡窓は安政三年（一八五六）に歿した。享年七十五。彼の一生は闘病及び求知の生涯であった。

淡窓は、日本近世後期における著名な漢学者、教育家及び詩人として、日本思想史、教育史及び文学史において重要な地位を占める。淡窓その人とその思想を研究することは、近世思想、及び漢学史を研究、考察する上できわめて重要である。明治期から今日に至るまで大勢の学者が、淡窓とその思想を深く研究しており、一つの専門学問——淡窓学ともいえるものが形成されている。

淡窓の生涯にわたる著作はかなり豊富であるが、そのうち、哲学に関する代表作は、「三説」と称されている『約言』、『析玄』と『義府』である。さらに、これらの三著者を補充説明した日記、筆記等も数多くある。このなかでは、伝統哲学のあらゆる問題が東方文化のさまざまな方面に互って論じられている。これらの著作から淡窓の哲学思想を見てみると、其の自然哲学思想、自然観が彼独特のものであり、それが淡窓思想において主要な地位を占めていることがわかる。

淡窓哲学思想の主要学説は「敬天説」⁽²⁾、「制教論」⁽³⁾と「理義の説」⁽⁴⁾である。これらは淡窓の自然観と本体論（存在論）であるだけでなく、さらに淡窓の人生哲学と知識論でもあり、その自然観またその道徳倫理の有機的な構成原理であり基本前提である。だから、淡窓研究においては、自然観から手をつけることが必要である。そこで小論は淡窓の著述から出発し、前人の発表した研究を踏まえつつ、淡窓自然観の内容と構造に対して考察を試みようと思う。

第一章 淡窓自然観の基礎

一、天、天命、天道、数、理義の諸概念

淡窓哲学の中でも「敬天説」はその思想の中心であり、故に、この天概念は淡窓の哲学理論の最も主要な支点である。

「天」に関して、淡窓は、『約言』の第二則に、

その万物の生何くより出で、而してその死何くに帰するや。誰かこれを寿夭し、誰かこれを窮達するや、固より吾人の測知する所にあらず。古昔の聖人、仰ぎて観、俯して察して、宇宙の理を窮め、以て彼の蒼々の中、主宰者の存する有るを知る。乃ちこれを尊んで上帝と曰う、なお人間に帝王あるがごときなり。

と述べている。このように、天を最高の主宰者の地位に位置づけるのである。

天の形状に関しては、『約言或問』に、

天の形体は空虚清明である、……（中略）天にはもと高下もなく、長短もなく、始終もなく……⁽⁵⁾

と論じている。ここでは、天は確かに存在する一つの實體であり、この實體は空間及び時間を超え、しかも宇宙の最高主宰者として万能であり、全知全能であることを明らかにしている。『約言或問』では、「天は万物を監視すること、はなはだ明白である。どんな隠されたものも、小さいものも、皆照し出される。人間の善悪も一々知っている」という。この点に関して、工藤豊彦博士は、「天の全能の知と無限のはたらきを示すことを論じている。かように、擬人化された天は、即ち上帝である」と述べている。⁽⁷⁾

次に『約言』では、また「天命」、「天道」などの観点を提示している。『約言』第五則に、「そもそも生命のある万物は、いずれも命を天に受ける」といい、また、『約言』第二則に、「天のなす所、これを称して命と曰う。なお王者に命令あるがときなり」という。工藤博士は、「天のなすところが即ち命である。天は最高の主宰者であり、また絶対の支配者であるとされる。およそ生きとし生けるものは、みな天の命を受け、天の命の制約のなかに生きる。天は万民の父母であるから、その関係は一層密接であるとされる」と天及び天命の関係に対して分析している。

これは淡窓の「天人合一」思想を的確に説明したものである。淡窓は、天が人格神であること、且つそのみでなく直接の最高主宰者でもあることを明らかにしているのである。故に、天と人間は直接に繋がっている。「天人合一」の中の人とは、君王ではなく、百姓を含めた人間一般である。このように天道とは具象的な實在（存在）であり、淡窓の思想では、まず君王が天より命を受け、天意を奉じて万民を統治するという関係を単純化して、その君王の「人事」を省き、天及び天命、天道と人間（万民）との直接性を強化した、つまり存在関係の直接性を強化したのである。これが淡窓の天人合一論の重要な特徴である。

ここで『約言』に述べられている一つ一つの観点を通して、淡窓の天人関係は、次のように分析できると思う。

天命の意味は、即ち天意（天の意志）を実施する過程及びその結果であり、天意の達するところみな天命である。このように、人間社会の各方面の秩序はすべて天命であるから、人間のさまざまな行為はどれもこれも天道に従うことを要求される。天と人との関係は親子関係と同じようなものであり、故に、天道は必ず成立するのである。かくして、淡窓は、「父母の衆子における、その相い愛するを欲し、その相い害するを欲せず。故に天道は善を好んで悪を「悪む」（『約言』第二則）と述べている。

この故に、人間は必ず天の好むところを行ふべきである。『約言』第二則に、「人、天の好む所を行えば、天もまたその好む所を以てこれに命ず。人、天の惡む所を行えば、天もまたその惡む所を以てこれに命ず」と述べている。かくして、人間社会では、聖人が道德教化を立て天命を奉じ、天道を行ふのである。

「数」は淡窓哲学のもう一つの重要な概念である。ここでいう数とは自然界及び人間社会の秩序と發展變化の過程（プロセス）である。これは実体存在の法則を反映したものである。ここでは、事物の本体と規律には同一性があるのである。『析玄』第三則に、「……それ数は有形の免れざる所なり。昼夜相い代り、寒暑相い推すは、数の天に在るものなり。高岸の谷となり、深谷の陵となるは、数の地に在るものなり。生ずれば必ず死あり、興れば必ず亡ぶあるは、数の人に在るものなり」という。だから、万事万物はみなそれぞれ自分の数を有している。数は事物の一種の規定性であり、事物の当然依拠するところである。事物は数に依拠して發展變化し、また、天でさえも数があるのである。

『析玄』第十則に、「天道の善に福し惡に禍するは、理なり。盈つるを欠きて損するを益するは、数なり」と述べている。ここでは、数は事物の根元であり、また、理は「天理」（天道自然の理）として「天道」を明らかにする。理は事物の準則であり、故に、理が事物の善惡の「数」をよく判別し（物を測るものは、それ自身も必ず数を持つている）、その上でこれを決定する。このように、理にも数があり、善を福にし、惡を禍にする變化はそれ自身の数によって決定されるのである。

特に、人間の数に関しては、天の数及び地（物）の数との違いを明らかにするとともに、更に一步進めてこれに制御を加えることができるとする。『析玄』第三則に、「但し、人間は心を持つているのであって、天や地とは同じ所に属するのではなく、したがって定まった数が到来するについても、人の行為によって變化するのである。最も大事な点は、道をふみ行つて数を制御することである」と論じている。

理義の概念に関しては、『義府』の冒頭に『程氏易伝』の言葉を引用し、「物に在るを理と爲し、物に処するを義と爲す」（艮卦）といい、また、自分の言葉でも、「理は天より出で、義は我に由つて立つ。天に在る者、既に明かなり。我に在る者、これを左右に取りて其の原に逢う。故に、理は義の府なり」と述べている。ここでは、理は事物の自然

の理である。即ち事物の条理であつて、これを自然觀からみると、事物の法則の意味となるのである。

禍福応報の観点は天命觀、天道觀に由来する。だから、天は「知」があり、惡を憎み善を好む。天意は人間に通じ、人間もまた福を好み禍を憎む。天命に違ふべきではない。天命に違えば天が災禍を降すだろう。だから、人間は必ず善を行なつて惡を抑止すべきである。これが淡窓の「敬天說」における天人關係が體現されたものであり、また、「敬天說」の根拠の一つである。故に、『約言』第二十二則に、「天道善に福して惡に禍いすと……（中略）而るに人或はこれを疑う。善必ずしも福せず、惡必ずしも禍いせざるを以てなり。これ書を読むこと精しからざるの過ちなり。『易伝』に曰く、『積善の家には必ず余慶あり、積不善の家には必ず余殃あり』と。……（中略）これに由りてこれを觀るに、善、福せず、惡、禍いせざるは、勢い然らしむるなり」と論じている。ここでの淡窓の観点によれば、善と惡の行為が福及び禍の降る決定的原因であり、天及び数の變動がその基本的原因なのである。

二、『敬天說』の原点

淡窓哲学の中では、「天」は無数の事物をすべて包容する實在体であり、世界にある万事万物はまったく天より出るとされる。天は、無上の權威及び至らざる所なき能力を備えている。だから、人間は天に対する畏敬の情を抱くのである。世上の一切の秩序と、自然界の変遷、王朝の交替、人間の倫常秩序、尊卑貴賤、災難異変など、天が皆しからしているのである。天は最高の主宰者である故、人間は必ず天を敬わなければならない。天意に対して従順で、天が規定する道に違反することはできない。ただ敬天してはじめて安身立命することができるのであり、敬天が最高原則となつてすべてに通じている。そこで、淡窓は「六經の旨、一言にして盡すべし、敬天是れなり」（『約言』第二則）という。

このようにして儒家思想で倫理道德、綱常名教、及び典章制度を包括し、すべてを「敬天」の下に統轄したのである。敬天の意義は自然觀から倫理觀に向い、天道を以て人事を明らかにし、そして宇宙論、存在論（本体論）と人生哲学とを結合させたことである。これが、すなわち淡窓の自然觀の帰着点であり、人生哲学の出発点である。

淡窓の自然觀は、天というこの外在の客觀世界の本原を、「敬天」の方式を通じて、人間の主觀的活動と緊密に結

びつけ、それによって敬天説を内面化させている。自然觀と敬天、及び「敬天の心」とを合一したことで、主觀的色彩が強化されている。これは淡窓自然觀の一つの特徴である。しかし、これと陽明学派の心学の思想とは異なっており、また朱子学の理氣二元論の立場とも完全に一致はしない。また老子の「道」の思想とも似かよってはいるが、それとも同一視することはできない。一体、淡窓の自然觀は折衷性を有するユニークな自然觀なのである。しかもその自然哲学の多くの基本概念は、決して同一ではなく、それ自身の意義(価値)を有するという考え方である。

第二章「制数論」と「理義の説」

一、「制数論」の根拠

淡窓の「制数論」は、主に方法論として使用されている。しかし、その哲学的意義はこれにとどまらない。淡窓の思想的成功は老子の存在論、方法論と儒家經典とを一体に融合させたことにある。これによって淡窓は、自然觀を「有」と「無」といった境地の中で活動させ、さらに、晩年に至り己の思想を円熟させたのである。

淡窓は『析玄』で、『老子』一書の主旨を剖析し、且つ己の「制数」思想を提示している。制数の「数」は、一種の定数ではあるが、物事が變動し、人間が思惟(主觀的活動)をするために、その数は変化する(前章を参照)。したがって、これが制数の前提となっている。

淡窓は、『醒齋語録』に、「老子の学は、数の一字に歸するなり。天に昼夜寒暑あり。人に生老病死あり。国に興廃盛衰あり。皆これ数なり。誠に理づめなる者にして、一分一釐のぬきさしならぬ者なり。老子此の数をさして自然と云う。……(中略)天の付与する所は、定数ありといえども、我々これを用いること多ければ、速かに尽き、是を用いること少なければ、長く存す。故に老子は、聰明を退け聖知を断ち、専ら無為を尚ぶ。是れ精氣を養いて長く存せんが為なり。国家の氣運も、またかくの如し。甚だ盛なる時は、其の数早く満ちて、衰うることまた速かなり。盛を極めざれば、其の数みたずして、衰うること遅し」と論じている。この天与の数は定数であり、それを使いすぎれば、必ずこれを使い盡くしてしまふ。だから、その「数」を制御することが大切なのである。これが淡窓の制数論が

成り立つ理由である。

次に、淡窓の制数論の理論的根拠を明らかにしたいと思う。

淡窓は老子の「無為而治」に賛同し、さらに、老子の「玄」を解釈して、「玄とは幽明にして明らかならざるの謂いなり」（『析玄』第一則）と言う。「玄」の哲学には変幻極まりなく測り知れぬという意味が含まれている。だから、「無」に依拠しなければならぬ。「無為の道」にして始めて宇宙天地の謎を解明し、物事の変化と発展の法則を探究し、人間社会の変化の数をとらえることができるのである。これが淡窓哲学における自然観と方法論のすぐれたところである。

淡窓は、『析玄』第二則に、「玄は宗とする所の者無きなり。無は神明の徳、造化の機にして、聖人之を象るなり、無は得て言うべからず。已むを得ずして之を言う。其の彷彿を挙ぐるなり。虚は其の思ふ無きを言うなり。静は其の爲す無きを言うなり。一は其の二無く、三無きを言うなり。玄は其の変化測られざるを言うなり」と論じている。淡窓はこの言葉を通じて「玄」及び「無」の関係を明らかにした。さらに重要なのは、「玄」の表現が「無」を通して進行していることを肯定したことである。且つ「無」は事物の発展と変化の数であることを明確にした。このように、「無」と「有」を結びつけたのである。これによって、制数論の根拠と「玄」を分析するための前提へと到達したのである。『析玄』第二則の首句を、淡窓の門人、矢上行は次のように批評している。「神明の徳は体を以て言え、上天の載、声も無く臭いも無きなり。造化の機は用を以て言え、四時行われ、百物生ずるものなり。聖人之を象るとは、人人能くする所にあらざるを言うなり。造語精確、一時も苟にせず。体用関係から天の本体と天の運行（天道も含む）の二者を統合したものと説明している。

淡窓の「天」は世界の本原、実体、一種の定数、一種の秩序ではあるが、「天」の秩序は同時に「玄」にも通じて表現されている。つまり、「幽明不明」ではあるが、「玄」の後に「無」、或は「数」がかくされている。それから一歩進んで、「無の用たる、数を制するの道なり」（『析玄』第三則）と言ひ、これをはっきり示すのである。続けて『析玄』第四則の中で、「無、能く数を制するとは何ぞや。無の義広し、然れども要を挙げて之を言え、則ち其の有、有らざる（不有其有）の謂いなり」という。「無」はすなわち「不有」であり、「不有」はすなわち「有」である

と論断している。また「夫れ唯^た有^たたず、是を以て失わず、是れ数を制するの要なり」（同前）と述べ、「不有」——変化中の数をとらえることを示している。これも制数の前提である。

制数の目的は事物盛衰の理をつぶさに見て、古今の変に通じ、天命に安んじ、天徳に報い、聖人の教えを明らかにすることである。

二、「制数論」の中核とその方法

『析玄』第五則の中に「制数論」の中核と根本方法が示されている。

富貴顕栄は我が欲する所なり。其の去るに当たり、追いて之を留む、貧賤汚辱は我が惡む所なり。其の来るに当たり、拒みて之を逃す。是れ区々の力を以て造化と捷を争うなり。何ぞ夸父の日と走を競うと異ならんや。善く数を制する者は然らず。我が欲する所や、其の未だ去らざるに及びて之を逃す。我が惡む所や、其の未だ来らざるに及びて之に就く、我逃ぐれば則ち彼逐う。猶ほ影の人を逐うがごときなり。我就けば則ち彼避く。猶ほ人の影を逐うがごときなり。蓋し彼の来去に定数有りて、我常に之に先んず。先んずれば則ち物を制するなり。故に虚は実と為る所以なり。静は動と為る所以なり。一は多と為る所以なり。玄は明と為る所以なり。其の用測られず。尼父猶ほ竜の嘆くがとき有るは、此を以てす。

又、同書第六則に、

『語』に曰く、「山を隔てて煙を見、早く是の火を知る。これ魯人の為なり。」と。敏なる者は則ち然らず。角を見て馬を知り、足を見て蛇を知る。夫れ良賈の貨を居^{たくわ}うるや、夏なれば則ち裘^{きゅう}を資し、冬なれば則ち葛^{かつ}を資す。早なれば則ち舟を資し、水あれば即ち車を資す。夫れ唯早く知る。是を以て其の数に先んじて之を制す。故に太^こ上は数を制す、其の次は数に任す。『易伝』に曰く、「天に先だちて天違わず」と。数を制するなり。又曰く、「天に後れて天の時を奉ず」と。数に任すなり。

と論じている。ここでまた二つの重要な観点を挙げている。一つは、先ず制数の地点と場合、即ち制数する要件と依拠するところの性質を示したものである。魯人の制数することが効果を持たないのは、制御しないことと同じであり、

つまり制御の術を本当に分かっていないからである。だから、以上の場合、実際は、「天に先だちて天違わず」（即ち物事の発展の法則を超えられない）という立場に陥るのである。もう一つは任数であり、即ち天の時を奉じて行うことである。これも実際は、また一種の制数であり、ただこの制数は後に数を制御するだけのことである。

『析玄』は、また「盛極則衰」という事理の中の深層思想を提示している。即ち盛の極はすなわち衰亡の兆であるという道理である。『析玄』第七則に、「盛極まれば則ち衰う。人皆之を知りて、盛の極は即ち衰の兆たるを知らざるなり。夫れ孟夏純陽、なおいまだ太だ熱からず。六、七月群陰下に生ずるに至り、而る後金を流し石を樂するなり。寒氣また然り、陽後の候を待ちて後猛厲なり。……（中略）是を以て数を制する者、其のいまだ盛んならざるに及ぶなり、盛んになりて之を制するは晩し、況や其の衰に至るをや」と述べている。

前に述べた観点はみな淡窓哲学の中の重要思想である。自然観の角度から見れば、「制数」は、一種の世界の本体、事物の理（所以然の理）及び万事万物の生成、発展と変化の趨勢を把握し、制御することである。それと同時に、また天人関係に対する一種の新しい見解でもある。即ち「数」で事物の形成と変化を説明し、制数で事物を判明し把握することを説くのである。近世において淡窓がこのような思想を生み出したということは、注目に値することである。

三、「理義の説」における自然観の意味

淡窓は、『義府』の中で、「理は義の府なり。……（中略）閑居静坐にして、輒ち事物然りとするゆえんの理を求め、之を徴するに心を以てす。心安んぜざる所は、旧説有りと雖も欠如す。見る所有るに至り、敢えて自ら隠さず。極めて私言臆説、大方を取笑するを知る」（第一則）と述べている。

淡窓は先哲の「物の理」という古訓に賛同し、自分の「条理の理」の観点を生み出したのである。理は宋学では宇宙の根元であるから、淡窓の理と宋学の理は同じではない。淡窓の理は、ただ事物の条理であるに止まり、世界の本原ではない、一種の秩序或は道理と見なすべきである。しかし、総体的存在論及び人生哲学に関しては、程朱の学説に近いものと言える。

例えば、義理關係に關しては、『義府』第一則に、「古の理を窮むる者、理を以て義を立て、義を以て礼を制し、礼を以て事を行う。唯其れ理を見るや達せり、こゝを以て義を立つるや活す。礼と事と其の中に在り」、また、「宋賢ノ説ハ、理外義ナク、義外理ナシト定メタル様ニ見ユ。予ガ説ハ、理ヲ体トシ、義ヲ用トシ、理ハ古今一定ノ者トシ、義ハ時ニ從ツテ變動スル者トス。宋賢ノ理一分殊ト云フ説モ、大抵相似タル事ト覺ユ。此クノ如クニ立ツルハ、拘泥ノ失ヲ救ハソガ為ナリ」と述べている。

淡窓が『義府』を著述した目的は、『易经』を主として、陰陽と人情事物の自然の理及び人生論を明らかにすることにあつた。

淡窓は、『易经』中の「兼三才（天、地、人）而二之」の立論に賛同し、しかも、「陰陽」で三才を統攝するということ強く主張している。後人が五行説を陰陽論に挿入したことに反対し、『易』に依拠して、物質構成の観点（理氣觀も含む）を説明したのである。

『義府』第四則に、「天の体は氣なり。其の精は火なり。地の体は土なり。其の精是水なり。火氣水土の説、加うべからざるのみ、或は地水火風と曰う。亦実同じくして名異なる」と論じている。淡窓は陰陽剛柔をもつて天地の間を説明し、陰陽の本体より天道を立て、火氣水土四つの最も原初的な物質概念からその世界觀を成立させたのである。又、『易』は陰陽を言いて五行に及ばず。乃ち八卦を以て之を論ず。離震、火と為る。乾巽、氣と為る。坎兌、水と為る。坤艮、土と為る」と論じている。

さらに、「火氣水土は物の質なり。其れ離合有るなり。離るれば、則ち天地位して万物生ず。合すれば、則ち天地混じて万物滅す。一離一合、百億万歳に互り長く存す。豈に離るると離れざる、合うと合わざる者有りて之を運用するにあらざらんや。抑之を視るも見えず。之を聴くも聞こえず。之を言いて明らかにすべからざるなり。是を以て、聖人敢えて之の名を定めず。其れ上に在るよりして之を天と謂い、尊崇すべきを以て之れを帝と謂う。妙用不測を以て、之れを神と謂う。三つの者、出づるところ同じくして名異なるなり」（『義府』第五則）と述べている。要するに、これは淡窓の宇宙論と物質生成論であり、物質の相互作用離合を強調したものである。又、天の三つの屬性を説明して、天は高きに在って、尊崇すべき対象であり、その妙用は不可知である。「天、帝、神」の三者は同一のものであつ

て、名を異にしているだけであるとすると。

ここで論じられている宇宙本体論と生成論の観点は宋儒の理氣説に基づいているが、両者には相違点がある。淡窓の義子青邨はこの条を次のように解釈している。

三者の目は、宋学に本づけども小異あり。……此れ理氣の説なり。但し一書の旨、天を以て神と爲し、之を敬するに在り。おもえらく、理は天より出づと。理は窮むべきにして天は測るべからざるなり。故に、「天即理なり」の理を戴かず。凡そ書中の理、皆条理の理にして、理氣の理にあらず。⁽¹²⁾

淡窓の生成論と物質論においては、天は最高の宇宙の本体であり實在性（物質性）を有している。ここに朱子の理本論との間に相違が生じるのである。つまり宋学の説と源流は同じであるが、途は違っている。則ち陰陽觀から、道器論へと發展した形而下の理論は同じであるが、形而上の理論では、天が太極、理に取って代わっているのである。

この区別点に関して淡窓自身の解釈は、『夜雨寮筆記』に、「聖人ノ教、天ヲ敬スルヨリ先ナルハナシ、後世仏説起リ、……（中略）宗賢乃人ノ疑フ処ニツイテ義ヲ立テ、縦令天地崩ルル時アリトモ、其主宰タルモノハ長ク存スト言フ、是レ理氣ノ説ノ出ル所ナリ、但所謂理ト言フモノ、有ルカ如ク、無キカ如シ、得テ知ルヘカラス、故ニ伊物（仁斎・徂徠）ハ之ヲ無シト云ヒ、宋儒ハ之ヲ有リト言フ、我其ノ有ニ從フト雖モ、顯然トシテ見ルヘキモノアリト言フニハ非ス、故ニ之ヲ理ト云ハスシテ、天神帝ノ三字ヲ以テ、之ヲ形容ス、是レ予カ宋説ト同中ノ異ナリ、義府窮理ヲ主トスト雖モ、皆条理ノ理ナリ、理氣ノ理ニ非ス、天ニ至ツテハ、之ヲ不可知ニ歸ス、即敬天ノ義ナリ」と述べている。⁽¹³⁾ この点に関して井上源吾博士は、「これによれば、淡窓の宇宙論は朱子学に基づくが、純理論の理氣の説にあきたらず、理を天神帝と言つて、約言の敬天説と有機的な関連をもつようにした。純哲學的思惟からの一步後退ではあるが、淡窓にあつては活きた思惟として独自の領域が形勢されるのである」という結論を下している。⁽¹⁴⁾

淡窓は、『義府』第三則に、「窮理の要三つ有り。一に曰く、万物皆陰有り、陽有り。二に曰く、陽尊くして陰卑し。三に曰く、陽尊くと雖も孤立すべからず。陰卑しと雖も偏廢すべからず」と論じている。このように、その陰陽觀を展開し、且つ、その人性論に関する観点も同時に論述しているのである。

淡窓は、陰陽、剛柔、仁義、動静と四つの原始物質（火氣水土）の配列により、動物、植物が生まれるとし、その

発展及び人性と物性の区別を解釈した。

例えば、「動、陽となす。人禽是れなり。静、陰となす。草木是れなり。動物は人を以て陽となし、禽、陰と為す。人は神知を以て陽と為し、形体、陰と為す。神知慮を以て陽と為し、情欲、陰と為す。思慮是非を以て陽と為し、利害、陰となす」(『義府』第六則)、また、「花卉之れ芬菲なり。殊玉之れ玲瓏なり。清なれば、則ち清し。頑なるかな無知。人身は穢濁あひの藪にして、靈明の寓なり。故に物、愛すべき有り、必ず憎むべき有り。愛憎の相、因は即ち陰陽の相い離れざるなり」(『義府』第九則)と論じ、したがって、「陰陽の理、層々相包むなり、なお蕉を剝くがごとく然り。而して尊卑の分、秩然として乱るべからざるなり」(『義府』第六則)と論じている。

ここでは、陰陽で万物を統轄し、且つ、一つ一つの事物はおのおの陰陽の属性を持つていてそれぞれ分類されるが、陽の中には陰もあり、同様に、陰の中には陽もあることを究明したのである。

「義」に関しては、『義府』第十六則に、「理義並て言え、義は即ち道なり。仁義並て言え、義も亦道の一端なり。仁義の教、陰陽に配するなり。仁は陽道なり、……(中略)義は陰道なり、……陰陽の偏廢すべからざるなり」と言う。

これによると、淡窓の義は二つの解釈を含む。一つは、『易伝』に基いて論を立て、義の依拠するところ、標準は物事の変化に従って変わるということ、即ち処物の義である。もう一つは、己の道德を修めて、人間の倫理及び人の倫常関係を調整する準則である。

淡窓は、その陰陽観から出発して、精緻な人性論を説いているが、小論では主に「三説」から淡窓の自然観思想を帰納することが目的であるので、倫理道德観念及び人生哲学などの思想の内容に関しては、省略する。

第三章 淡窓自然観の全体性

「敬天説」を基礎として樹立された淡窓哲学の自然観は、儒老の学説及びその他の諸子の思想の長所を総合して作られ、宏大で独特な思想体系である。

淡窓の哲学思想は、その第二部著作——『約言』で論述した「敬天説」を出発点として、これを展開したものである。「敬天説」は淡窓哲学思想の核心であり、「敬天」とは、天を最高の崇拜、模範の対象として、畏敬の情で天に対することであり、ここでは、天は単に宇宙の本原と最大の存在であるばかりでなく、世界の主宰者でもある。天観念を樹立してからの淡窓の宇宙観（世界観）は一元的な存在論である。かくして、この敬天思想によって自然観と人生哲学の各方面を着実に敷衍させていったのである。

十年の後、淡窓五十七歳の時に『析玄』を著わした。淡窓がこの書を著わした動機と論述の要旨は、彼の自叙伝である『懷旧樓筆記』の中で次のように語られている。

天保九年十月十六日析玄が脱稿せり。四千三百余言なり。予少きより、老子を好む。去年久兵衛が家難あり、予も亦病厄にかかおり、此時内に感ずる所あり、一書を著すの志を発す。……（中略）大意老子の旨、制数二字に帰することを明にす。是古人未発の説なり。内は己れが身心よりして、外は天下の政務に及ぶまで此二字を以て、之を処せんには、当世の要務これに過ぐるることなしと思えり。⁽¹⁵⁾

『析玄』における制数論と「盛極則衰」の思想、「無」の「不有其有」という解釈は、疑いもなく淡窓の自然哲学を極めて豊かにするものとなっている。

『義府』は天保十二年（一八四一）、淡窓六十歳の時に著わされた。『燈下記聞』に、「自ら其の著述の意を明らかにして曰く、約言は命を明らかにし、義府は理を明らかにし、析玄は数を明らかにす」⁽¹⁶⁾と述べている。

要するに、『義府』では、陰陽観、人間と事物の自然の理（事物の条理）及び人性論が述べられている。その中の陰陽観と事物の自然条理は、彼の自然観を補足する重要なものであり、これによって、彼の自然観は、さらに円熟を増すのである。

「三説」中に提出されている命、数、理の三つの核心は、皆実体を備え、天、陰陽、無、義等の概念と範疇を同じくして、淡窓の自然観と本体論（存在論）を構成しているということである。亦これは、人生哲学の根拠でもある。淡窓の哲学概念とその論述の対象は一つ一つ対応関係がある。例えば、天は命に当たり、陰陽と「無」は「数」に当たり、義は理に当たるなどである。これらは淡窓の自然哲学に全体性があることを十分よく説明するものであり、そ

の自然觀の論理性と独特な性格をよく表している。

ところが、淡窓の自然觀、或は存在論における概念や諸學說の間には、時に明確な規定（定義）のない場合がある。例えば、「天」の概念に関しては、時には本体論となり、時には倫理觀となる。また「義」に関しては、時には実体であり、時には主觀概念である。「理」の意味は、時には朱子學の理氣二元論的立場と一致したものとされ、時には自然の理（或は条理の理）を指さすものとなる。この「体用一源、顯微無間」の特色は、確かに伝統的東洋文化、思想の特徵でもあるが、淡窓哲學の折衷的特色をよく現しているものと言えよう。

以上の分析を通して、ここで淡窓の自然觀に対する一つの定義を試みてみようと思う。敬天及び天人合一思想を基盤として打ち立てられた淡窓の自然觀は、天の存在を中心とし、天命論、制教論と事物の自然の理を基礎とする、儒老思想を総合させた体系である。

この自然觀の中に、老莊思想が導入されているということが、淡窓の自然觀の最大の特色である。つまり、朱子學、古學派を老莊哲學と融合させたのである。このような融合は、もちろん「天」と「道」を同一視するということではないし、「天」と宋學の理の概念は必ずしも根本的衝突を引き起こしはしない。例えば、北宋の周敦頤が『太極圖說』、『通書』をもって言を立て、老子の思想を援引して儒學に取り入れたようなものである。同様に、淡窓は「道の主要な根源は天より出る」と「無為」という思想を體現したということができよう。淡窓は単に老子の道（玄）、「貴無」を重視するだけでなく、さらに、この道の觀點を自分の自然觀の中に取り入れて結びつけ、これに動態の性格を加えたのである。だから、老子の「道」を以て淡窓自然觀の天に置き換えたのではない。つまり、道（玄）をもって一種の哲學方法としてこれを使用し、儒學を体と為し、老莊を用と為したのであると思われる。

『析玄』第二十八則に、「五千言は用世の術なり。後人、善く之を説ます。専ら枯寂の談と為す。其の妙用隠るるなり」とある。つまり、淡窓は、天を体とし、玄を用とし、体用關係で説いている。しかし、自然觀の全体より見ると、老莊哲學の諸概念を使用することにより、天という本体と世界の事物とを結びつけたのであり、これによって、淡窓哲學の自然觀の外延はさらに拡大された。天は本体であるだけでなく、物事の生成と發展及びその間の關係ともなるのであり、且つ、「用」のプロセスは、また自然觀の本体の運動及び發展（展開）の過程である。故に淡窓の自

然觀は、どこにでもよく対応することができるのである。『析玄』の文末に、「玄門の言に至っては、常に形無く、定まる勢無し。苟も其の要領を得れば、則ち施して可ならざる無し」とある。このように、儒学と老莊学に自由に入出したことが、淡窓の自然觀と學術の円熟をもたらしたと思われる。

おわりに

淡窓哲学の自然觀は、一貫して一元論の前提を堅持した上で形成されたものと言うことができる。このようにして本体論（存在論）的意義を持った実体概念を組合せ、その上に「三説」の内容を拡充させて同時にこれを打ち立てたのである。

淡窓の學術は嚴謹方正であり、単に典籍に従って聖人の言葉を奉ずるのみならず、諸家思想を融合するという理論方法と思惟方式は生き生きとして活発であり、しかも一定の批判精神を持っている。淡窓の学は学派に拘らないが、道統を守っている。淡窓は、『析玄』第十一則の中で、制教思想でもって中国の歴代王朝の盛衰を分析している。例えば、「国を有つの道、唯其の数を制し、盈満ならざらしむるのみ。此れ聖人の秘旨なり。我、拘儒の革命を疑う者を悲しむ。故に、己むを得ずして、之を洩らす」と述べている。

これは淡窓が社会歴史の観点からこの問題を論じたものであるが、淡窓は諸家の思想を包括しながら、同様に道統を守り学派に拘わることをおそれ、止むを得ずしてこの言を発したと言うのである。これは別の側面から、自己の自然哲学思想とその他の学派の同じではないことを説明したものである。

淡窓の自然觀の帰着点は主に自然哲学と倫理及び人生哲学の方面にあり、その自然觀は同時に倫理觀と人生哲学でもあると言うことができる。換言すれば、淡窓の自然觀はその哲学体系の中における前提でもあるし、結論でもある。この一体的構成と「体用不二」の特徴は儒学の特色でもあったが、小論は淡窓思想の中から特にその自然哲学思想を抜き出して論述したものである。

〔注〕

- (1) 松下西洋（一七六四～一八一〇）。江戸時代、筑後の人。名は夷、字は世民、通称は勇馬、号は筑陰。久留米藩士松下高景の第三子。初め医を業としたが、のち儒をもって久留米藩に仕えた。のち豊後日田に赴いて講説し、当時の門人に広瀬淡窓がある。寛政中、佐伯藩に招かれて、藩校四教室の教授となった。文化七年没、年四十七。（『日本漢文学大事典』）
- (2) 「敬天説」とは、広瀬淡窓哲学思想の主要学説であり、淡窓の主著の一つの『約言』の中で述べられている。主な内容は、天は無限の威力を備えた世界主宰者、或は人格神——上帝、客観性を備えた宇宙実体であり、人間と社会を支配するものであるから、人間は必ず敬天を行う、ということである。
- (3) 「制数論」とは、淡窓哲学の学説の一つである。即ち世界の万事万物の内部には、自身の量の規定性——数がある。事物を制御するプロセスを制数といい、『析玄』の中で述べられている。
- (4) 「理義の説」とは、『義府』の中で述べられている陰陽、事物の理、義及び倫理に関する理論である。
- (5) 『約言或問』（漢文）十二頁、「天地章」。（『淡窓全集』中巻・日田郡教育会・大正十五年。以下『淡窓全集』を『全集』と省略する）
- (6) 同右。
- (7) 工藤豊彦著『広瀬淡窓・広瀬旭荘』九十一頁（叢書・日本の思想家35・明德出版社・一九七八年）。
- (8) 同右、九十二頁。
- (9) 『醒斎語録』巻一、七～八頁。（『全集』上巻）
- (10) 矢上行。字は子生、号は快雨、通称は行助。生卒年は不明。阿波の人。京師（京都）に在って玫瑰園学塾を開く。『析玄』の批釈と跋を書いている。（遠藤隆吉著『老子研究』などによる）
- (11) 『夜雨寮筆記』巻三、三十頁。（『全集』上巻）
- (12) 『義府』第五則の文中注。（『全集』中巻）
- (13) 『夜雨寮筆記』巻三、三十二頁。（『全集』上巻）
- (14) 井上源吾著『広瀬淡窓評伝』四百十頁。（葦書房・一九九三年）
- (15) 『懐旧楼筆記』巻四十、五百三十～五百三十一頁。（『全集』上巻）
- (16) 『燈下記聞』（『六橋記聞』巻一、一頁。（『全集』上巻）